

---

# 死番屋始末伝

鳥越丈二郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死番屋始末伝

### 【Nコード】

N2456BA

### 【作者名】

鳥越丈二郎

### 【あらすじ】

はじまりは二十年前、父の時代に謀略によって流された血があった。

その血の結末は刻を経た今も終止符が打たれることはなく、いつしか次の時代へと密かに渡された。

武家の次男坊、村山寅之助と悲劇の血を受け継いだ神谷の悪竜。

ある日を境に、ふたりはその血の運命に巻き込まれていく。

## 1・虎と竜

始末伝 1・1

東北の最南端に位置する、小さなその国の名は奥州水石藩。

その国境の山中には、真夜中の月明かりだけを頼りにして走る、若者ふたりの姿があった。

「どうした寅之助、もたもたしてると役人供に追いつかれちまうぞ  
前をいく青年は、そう言っただけに疾駆する。

まげを結わない歌舞伎の連獅子のような白い長髪。  
左眼には古い刃物傷が残る隻眼の若者。

通称『神谷の悪竜』。

そして彼の後ろを走るのは、まだその顔に若干の幼さを残す少年。  
名を村山寅之助といった。

「竜、あいつらの的はあんただ！さっさと山を越えてくれ」  
遠くから松明の明かりと、数人の男の声が聞こえてくる。  
「どうやら彼への追っ手らしい。」

「あんたは俺にとって兄であり親友だった。これが今生の別れだねって思わねえ」

袴姿はかまに太刀一本を腰に挿した武家の次男坊村山寅之助は、竜に背を向けて迫る追っ手を前に、ゆっくりとその太刀を抜いた。

「竜……、必ず生きて、また会おう」

「ああ……寅之助、てめえも死ぬな。また会う事は絶対の約束だからな」

「がってんだぜ……！」

それが別れ際に交わした、ふたりの会話だった。

その後、『神谷の悪竜』は水石藩から完全に姿を消し、以降ふたりが再会を果たすのは、十余年後の事になる。

この時、『神谷の悪竜』は十九歳。

同じく『放蕩の悪虎』と呼ばれた村山寅之助は十六歳。

若いふたりは、この日を境に、その人生を大きく変える事になる。

だがまずは、この火種が起こった前日まで、時を遡りたい。

十二月十九日。

その日の寅之助は、放蕩ほうとうの悪虎という呼び名どおり、長屋町のゴロツキ達と路上に座り込んで、チンチロリンやオイチョカブなどの博打遊びに興じていた。

この長屋町は、通称を神谷町という。

町民のほとんどは百姓以下という身分で、藩の人別帳に名前すらない。

他藩で盗みや殺し、火付けなどの罪を犯し、行き場をなくした流れのおたずね者が、終の住処として集まったのがこの集落だった。

いわば世の中のはじかれ者だけが暮らす町である。

村山寅之助はいつもこんな場所に入入りしていた。

だが彼のその身分は水石藩町方定廻り衆、与力の家柄に生まれた、れっきとした武家の息子である。

父親はその与力という身分として乗馬も許されているし、殿様にもじかに謁見できる上級武士であった。

その息子となれば次男坊であっても、このような場所に頻繁ひんぱんに出入りすることは許されない。

しかし寅之助という男は、そんな事を歯牙にもかけなかった。

むしろこの若者は、神谷町の方が、よっぽど自分の性に合っている  
と思い、家柄だとか、よそ様の目だとか、そんなことを気にしない。

道端に莫座もくざを敷き、お天道様の下で昼間から酒を呑み、花札やチン  
チロリンをする事は、彼にとってこの上ない娯楽である。

武家の放蕩息子と言ってしまえばそれまでになるが、寅之助は何よ  
りもこの神谷町に住む人間が好きだった。

ここには金持ちや上下の身分もないし、やれ礼儀だ、しきたりだ、  
学問だと、せせこましいわずらわしさが無い。

ただ、みんなが横一線の貧乏で、ただ横一線に太陽の下に生きてい  
る。

そして困った時は当たり前のようにみんなで助け合うから、誰も  
生活に苦痛を感じていない。

ここには人間の生活の原点があるんだ。

寅之助は常々そう感じていて、彼らの生活をうらやましく思ってい  
る。

そういう人と人の遠慮のない繋がりが好きだった。

毎日むずかしい顔をして、威張りながら町を歩く武士よりも、よほ

ど人間らしく感じるのだった。

だから幼い頃から、家人の目を盗んでは家を出て、いつもこの町に出入りしていた。

今や寅之助と、この長屋の住人たちとは、実の家族と変わりない間柄になっている。

だが、件の事件につながる火種は、この何気ない穏やかな日に起った。

神谷町の集落入り口辺りがやけに慌ただしかった。

見ると数人の武士が姿を現し、何やら口上文を読み上げている。

「神谷町住人は聞くべし！

来たる十二月末日までに、この町の住人は長屋を退去すべし。人別帳に記載ある者は藩内の他村へ移住を許可する。

又、人別帳で身分改めの出来ぬ者は只今より、この場にて詮議し、心身怪しき者は投獄とする！」

現れた武士は水石藩の役人の様である。

口上書の内容は唐突で実に一方的であり、神谷町は一気に騒然となった。

「何だよあいつら……！無茶苦茶な事を言っつてやがる。この長屋の奴らなんて、実際どいつもこいつも人別帳に名前なんざ、ありやしねえつてのに……。」

まさかあらかた投獄する気じゃねえだろうな、ふざけんなよバカ野郎！」

寅之助の博打仲間の茂吉が、腕をまくり上げて憤慨している。その言葉をきっかけに、神谷町のあちこちから、不満の声が上がった。

この町の人間は、元悪人ぞろいだけに気が短い者が多い。だが悪から足を洗って以来は住民同士結束の硬さが売りで、人情家も多い。

誰かれ構わず牢獄行きにしようものなら、こうなるのが当然の成り行きだった。

そんな光景を、道端に敷いた莫蔭で寝転がる寅之助は、嬉々として笑って見ていた。

「いいねえ、役人相手に一步も退かねえたあ……。やっぱり神谷町はこうでなきゃイケねえ。さあて、兄者はどうでるかなあ」

寅之助が言う兄者とは、押しかけて来た役人衆の中心で口上書を読み上げた武士、村山鷹利が彼の実兄だった。

そんな鷹利はひたいに青スジを立て、騒ぐ住民をキッとにらむ。

「黙らんか！叩つ斬るぞ貴様ら！」

キンキンと響く声で村山鷹利は怒なり声をあげる。



そのキンキン声に寅之助は、ひどい嫌悪感を抱いた。

ちっ……、なんだあの言い草は。

寅之助は幼い頃から兄鷹利と犬猿の仲であった。

気に入らない点を挙げたらキリが無いのだが、寅之助は特に兄の甲高い怒鳴り声が嫌いである。

思うようにならなければ怒鳴る。それで相手がおとなしくならぬなら、力尽くで黙らせようとする。

向かいあう人間のことなど考えもしない。

道行く場所で自分以下をすべて平伏させようとする、その兄の傲慢さが寅之助は気にいらぬ。

甲高い声はその身勝手さの象徴のように感じるのだった。

そんな鷹利の怒声に住民たちも一瞬は静まり返ったが、またすぐに群れの中から「斬れるもんなら斬ってみやがれ」と罵声が飛び返った。

元々が失う物の無い人間の集まりである。

血気の盛りでは彼らが一枚上であった。

……が、盛ん過ぎるには相手が悪かった。

「ああ？今、斬ってみろって聞こえたな……」

鷹利の顔に陰が射している。

眼が妖しく真つ赤に血走っていた。

いけねえ……！

寅之助は跳び起き、鷹利目掛けて猛然と走った。

だが、すでに遅かった。

鷹利は迷いすら微塵もなく、抜き撃ちに一番近い住人を胴切りにした。

その鮮血が勢い良く噴き出し、返り血となって鷹利をあっという間に朱く染めた。

まさかの光景に、群集は悲鳴と共に四散した。

「何やってんだ、ゴラア……！」

寅之助は鷹利の刀の柄と顔面を鷲掴みにして、そのまま押し倒した。

「本気で斬ってんじゃねえよ、この野郎！」

寅之助は急いで斬られた住人を抱え上げたが、着物の間から内臓が飛び出していて、思わず顔を背けずにいられなかった。

言葉にならないかすれ声が、荒い呼吸と共にもれてくる。

だが、もう何を言っているのか聞き取れない。

「くそっ……、死ぬなっ！こんなくだらねえ事で死ぬなっ……！」

寅之助は斬られた住人に何度も呼びかける。  
住人は致命傷だが、まだ微かに息がある。

しかし息があっても、なす術はなかった。ただ吐血と流血に苦しみ、  
涙を流すばかりである。

「寅之助か……。この愚弟め……。十手仕事の邪魔をするんじゃない！」

背後から兄、鷹利が抜刀のまま立ち上がっていた。

「どけ愚弟、貴様ごと叩き斬るぞ」

「やれるもんならやってみろ！クソ野郎！」

寅之助が怒りに任せて立ち上がるうとした瞬間、目の前に立つ鷹利は、背後から何者かに着物の襟首を捕まれ、再び倒された。

現れたのは、藍色の着流しを着た白髪の長い髪の男。

寅之助の眼前には、竜の姿があった。

彼は何も聞かず、寅之助の腕に抱えられた住人を見ると、静かに「……許せ」とだけ言い、そのまま斬られた男の首をあらぬ方向へひねった。

にぶく骨の鳴る音と共に住人が絶命したのを見届けると、竜は目を閉じて合掌した。

「……おい役人供。一体何の訳があって俺の仲間を斬りやがった」

竜の声が怒りに震えていた。  
そのまま静かに立ち上がり役人たちをにらむ。

「コイツ、神谷の悪竜だ……」

彼等の一人がそう言うと、役人たちは全員身体を強張らせた。

竜の内に燃え上がる怒りをその場にいる全員が感じとっていた。  
それは仲間の寅之助でさえ、息をのむほどだった。

だが、人一倍自尊心の強い村山鷹利は怯ま<sup>ひる</sup>なかった。

「ああ……、やっと出たか。自分から来るとは、捜す手間が省けた。  
神谷町の竜、貴様は投獄だ」

「投獄？何の理由で投獄だか知らねえが、まあいいさ。好きにすればいい……。  
だが仲間の仇が済んでねえんだ。俺をひっくくる前に、まずは覚悟しろよ、テメエら……！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2456ba/>

---

死番屋始末伝

2012年1月6日08時50分発行